

17歳の処方箋

2004(平成16)年11月13日鑑賞(ユウラク座)

★★



監督・脚本＝バー・スティアーズ／出演＝キーラン・カルキン／クレア・デインズ／ジェフ・ゴールドブラム／ジャレッド・ハリス／アマンダ・ピート／ライアン・フィリップ／ビル・プルマン／スーザン・サランドン（エスピーオー配給／2002年アメリカ映画／98分）

……タイトルからわかるとおり、繊細な神経をもった17歳の少年の心の軌跡をたどった映画。高圧的でエキセントリックな母親とダメ親父、そしてエリート街道まっしぐらの優秀な兄に囲まれて自分の行き場をなくした主人公のたどる道は……。サリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』の現代版と言われているが、果たしてそれほどのものか？ 私には単なる甘えにしか見えず、イライラしてくるが……。



この手の甘えた映画（？）は大キライ！

17歳、高校生、思春期という年代で揺れ動く若者の生き方をテーマとした映画はいくつもあるが、この映画はその中の「グレた若者」の生き方をテーマとしたもの。

同じようなテーマを描いた『エレファント』（03年）はコロラド州の高校で現実に起こった2人の高校生による銃の乱射事件を描いたもので、2003年のカンヌ映画祭で史上初のパルムドールと監督賞をダブル受賞した話題作。しかしこの映画に対する私の評価は非常に低い（『ナニワのオッチャン弁護士、映画を斬る！SHOW - HEY シネマルーム4』221頁参照）。

日本でも「荒れた若者」の事件が多発しており、そのため2004年4月には、「16歳以上」とされていた刑事罰対象年齢を「14歳以上」に引き下げるという改正少年法が施行された。

日本のマスコミや識者による議論においては、一方ではこのような少年非行を

「社会が悪い、教育が悪い、親が悪い」と主張して(?)擁護する論調が目立つが、私はそれが大キライ。

若者の「暴走」は、いつの時代でもまた世界中どこにでもあるものだから、そのすべてを悪と決めつけるつもりは全くない。

しかし『エレファント』やこの『17歳の処方箋』に登場してくる少年たちを見ていると、「お前ら一体何を考えているんだ!」と怒鳴りたくなってしまふ。

他方、『スウィングガールズ』(04年)の高校生たちや、『下妻物語』(04年)、『花とアリス』(04年)、『ターンレフト ターンライト』(04年)に登場してくる若者たちを見ていると、若者の力やその可能性が無限のものだと信じることができ、楽しくなるのだが……。

君は『ライ麦畑でつかまえて』を知っているか?

アメリカのJ.D.サリンジャーが1951年に発表した『ライ麦畑でつかまえて』は、日本でも結構有名となっている。

この本は、私が1967年4月大阪大学法学部に入学した1回生の時英語の教科書として使われたため、今でもよく覚えている。もちろんロクに英語の勉強などやらなかったが、この本の中ではアメリカの下層階級がよく使ういわゆる「スラング」がそのまま使われていたのが新鮮だった。

その代表語である「son of a bitch」(ちくしょう!)という言葉は今でも印象的なもの。

パンフレットによれば、「この現代版“ライ麦畑でつかまえて”ともいえる作品は、サリンジャーの表現した落ち着きのなさや、やけっぱちの雰囲気を見事にとらえている。おすすめ!」とか「スマートで小説的。『ライ麦畑でつかまえて』よりやや攻撃的に大人になりつつある年代のひりひりとした痛さを見事に描いている。カルキンが輝いている」と称されているとのことだが、私には大いに異論がある。

つまり、この映画を観ても、主人公のイグビー(キーラン・カルキン)には『ライ麦畑をつかまえて』の主人公ホールデン少年のようなアピールするものを感じることができないということだ。

金持ちのお坊ちゃんとして育てられ、しかも2人兄弟の弟で、兄は無茶苦茶優秀（ここだけは私も全く同じ）という境遇の中で育てられたイグビーが、この映画のような生き方をする事自体は別に否定はしないものの、一体それが「イグビーの生きる道」として映画になるほどのものかどうか、と私は思うのだが……。

奇妙な家庭環境であることは認めるが……？

ケツタイな男2人の兄弟に育ったのは、ケツタイな父親と母親からであったのはやはり当然。

エリート街道をまっしぐらに突き進んでいる兄のオリバー（ライアン・フィリップ）が一般的に（？）優秀でまっとうな人間だと評価されるのはある意味当然だが、所詮これも変なヤツ！

そして弟の主人公・イグビーは、その意味からは完全な落ちこぼれ。しかし落ちこぼれにオモロイ奴が多いのは世の常で、たとえば織田信長も小さい時は、周りの皆が「うつけ者」と言っていた落ちこぼれ組所属の人物。こんな2人兄弟に育ったのは、多分に母親ミミ（スーザン・サランドン）の教育によるもの。

パンフレットの表現によれば「エキセントリックで高圧的な母」とあるが、まさにそのとおり。

具体的なイメージは映画を観ればよくわかるはず。そして当然のことながら、父親のジェイソン（ビル・プルマン）は母親と正反対の気の弱い男で、子供たちにはいつも、「お前たちのママの言うことは正しい」と言っているだけの男。

このように、母親も父親もどちらかという親として「不適格人間」だが、この映画ではさらに「名付け親」と称するD.H.（ジェフ・ゴールドブラム）なる人物が登場する。

そしてこのD.H.も両親に輪をかけたようなケツタイな奴。しかし家族の監視状況から開放されたいイグビーは、こんなD.H.の誘いで夏の間だけD.H.の下で働くことになったが……？

女もちょっとヘン……？

この映画に登場する女性は、母親のミミ以外は、D.H.の愛人のレイチェル

(アマンダ・ピート) と、イグビーとオリバーの二股をかける (?) 女スーキー (クレア・デインズ) の2人。

レイチェルはダンサー兼振付師でパフォーマンスアーティストのラッセル (ジャレッド・ハリス) の友人だが、ラッセルはドラッグを売って日々の生活を立てている様子。

そしてレイチェルはD.H. からダンススタジオの提供を受ける代わりに、D.H. の愛人としての務め (?) を果たしている様子。イグビーはそんな2人の気ままな生活が気に入ったのか、このスタジオで寝泊まりしてラッセルやレイチェルとドラッグ三昧の生活。こりゃダメだ……。

他方、スーキーはベニントン大学に通う学生。イグビーが彼女に恋心を抱き、何とかモノにした (?) もの、ドラッグでボロボロになったイグビーを助けに来た兄のオリバーに口説かれるとたちまち方向転換してオリバーの女 (?) に……？

そんなスーキーの部屋を訪れてドアを叩きながらわめくイグビーの姿を見ると、「いい加減にしろ！」と言いたくなるが……。

最後はちょっとコワイよ！

あれほど高圧的で抵抗できない存在だった母親のミミも病気には勝てない。長い間乳ガンに冒されていたらしく、ミミの寿命は最期を迎えている様子。イグビーはそんな事態を知ると、「ヤッター！」と思ったらしい。そしてベッドに横たわる母親を前にしたイグビーとオリバーの2人の兄弟は、「確信犯」として睡眠薬を……？

しかしミミが死亡した後、はじめて母親への愛情を感じた (?) イグビーは、今度は一転して、「ママ 起きてよ」「ごめんね 許して」とミミの体を叩きながら泣き崩れることに。一体何だ、こりゃ！

そして最後に明らかになった秘密とは……？

2004(平成16)年11月18日記